

2022年7月3日

## 日本家庭科教育学会 第65回大会声明

日本家庭科教育学会は、第65回大会において、次の声明を発表します。

家庭科教育は、歴史的にもジェンダーと深くかかわっています。かつての女子のみ必修の時代から、すべての児童生徒が必修で学ぶ時代へと推移する中で、ジェンダーを問う内容が教科書に盛り込まれ、子どもたちが性別役割分業や男女共同参画の在り方について考える機会を用意してきました。ジェンダー問題へのアプローチは、家庭科教育の理論において一つの核をなすものです。

男女共同参画社会基本法制定からすでに約20年が経過しました。この間に、高等学校家庭科の男女共通必修が定着し、小学校から高等学校まですべての児童生徒が家庭科を履修した世代が社会の中核を担うようになりました。しかし、2021年の日本のジェンダー・ギャップ指数の順位を見ると156カ国中120位です。このような低位にある要因として挙げられているのが管理職や政治・経済への女性の進出が低迷していることですが、その背景には男性の家庭への参画が十分に進展していない現状があります。女性の社会進出・活躍が推奨される中で、育児休業等の取得をはじめとする男性の家庭生活への参画に向けた取組は、掛け声は聞こえるものの、実質化するための環境整備や意識改革に至っておりません。教育は、次世代育成という未来志向の営みです。家庭生活に足場を置いて社会とつながり、これからの生活者を育成する家庭科、家庭分野は、ジェンダー平等の社会を作り上げる主体となるための素地を、子どもたちに養える教科だといえるでしょう。

2021年12月の例会では「ジェンダー視点で考える家庭科教育の現在とこれから」というテーマで、小・中・高校の家庭科教師の方々に登壇していただきました。これまで家庭科、家庭分野の授業の中でジェンダーの視点がどのように取り入れられ、すべての人が自立し共生できる社会の担い手となるために、家庭科の学びを通してどのような力をつけていくことになるのか、授業実践の成果を報告していただきました。例会では、家庭科教育がジェンダー平等の実現に向けて、どのように寄与しうるのか、会員の実践から考える機会となりました。

2022年7月の第65回大会では、「ジェンダーの視点から考える家庭科教育の可能性—多様なジェンダーアプローチ・実践からの示唆—」というテーマで、ジェンダーに関わる研究活動や実践を展開しておられる家庭科教育以外の分野を専門とする登壇者による基調講演とシンポジウムを開催しました。教育社会学、メディア論、特別支援教育を専門とする研究者たちから見た家庭科の成果と課題が語られるとともに、男性にとっての家庭科の学びがどのような意味をもたらすのかという観点から家庭科教育の重要性が指摘されました。また、男女という枠組みに捉われない多様な性のグラデーションの中に、私たち一人ひとりが存在していることも、再認識しました。

私たち家庭科教育関係者には、ジェンダー平等の実現に向けた家庭科教育の意義を理解し、日々の教育実践の中で、子どもたちの気づきを促し、学びを拓いていく使命があります。

日本家庭科教育学会は、一人一人が尊重され、誰もがありのままの自分でいられるような社会の実現に向けて、人間の生きる基盤となる家庭生活に足場を置いて生き方を問う教科である家庭科、家庭分野の発展・教育実践の充実を目指します。そして、ジェンダー平等の実現に寄与するために、その成果を家庭科関係者内にとどめることなく、広く社会に発信し続けます。